

なかぞの しんじ
中 園 伸二 (びわこ成蹊スポーツ大学)

【背景】大学生の健康の捉え方は、一般的に病気でないこと、元気、体が不自由でないこと等が多い。健康を発達、社会、権利、多様性等の視点から捉えことも重要である。

【目的】健康の捉え方に関する発問を中心とした教材による健康教育を大学生に実施し、健康教育実施前後での健康の捉え方の変化を質的・量的に手始めとして検討する。その上で、健康教育の効果の検討を試みたい。

【方法】まず、健康の捉え方に関する発問中心の教材による健康教育(90分×3コマ)を2010年11月に大学生に実施した。教材例は、「健康とは何か」「体に障がいがある人にとっての健康とは」「戦争中に人を殺せずノイローゼになった人は不健康と言い切れるか」等である。その後、授業前後での健康の捉え方を記述させるレポートを提出させた。分析対象は、規定通り記述した109名分。健康の捉え方の内容項目を抽出し質的に分類した。また、授業前後での健康の捉え方が、分類したどの内容項目に当てはまるかを検討し振り分け、量的変化も把握しようとした。その上で、健康教育の効果の検討も試みた。

【結果】健康教育実施前の大学生の健康の捉え方は、多い順に、病気でないこと・元気が75%(82名)、身体面・体が自由に動くこと70%(76名)、障がいがないこと42%(46名)等であった。健康教育実施後の健康の捉え方は、多い順に、生きようとする姿88%(96名)、身体面+精神面+社会面73%(80名)、社会・環境の影響とその変革の重要性72%(79名)、健康の知識・意識の重要性61%(67名)、温かな人間関係の重要性58%(63

名)、多様な健康の捉え方の存在37%(40名)、健康は権利37%(40名)等であった。

生きようとする姿や社会関連等の健康の捉え方も含まれる割合は、健康教育実施前が6%(7名)であったものが、実施後には100%(109名)へと増加した。(P<0.001)

【考察】健康教育実施前の学生の健康の捉え方は、病気の反対概念や身体に関する健康の捉え方に限定される傾向が認められた。日頃の健康のイメージを反映していると考えられた。実施後は、例えば体に障がいがあっても受容し生きようとする姿、身体面+精神面+社会面、社会・環境等変革の必要性、健康の知識・意識の重要性、温かな人間関係の重要性、多様な健康の捉え方の存在、健康は権利等に注目する傾向が認められた。これは、実施した発問中心の健康教育の内容にもほぼ対応し、その効果が一定程度示唆された。

【結論】健康教育実施後には、生きようとする姿、社会との関連等、実施前に殆ど見られなかった健康の捉え方をする者が有意に多くなった。(P<0.001)発問中心の教材で人間の発達・生きようとする姿等に迫る健康教育の一定程度の有効性が示唆された。今後、健康等の捉え方やその分析方法を継続して検討し、対照群等も設けた研究を行いたい。

健康等の捉え方・健康教育についてご指導頂きたく存じます。

(連絡先)中園 伸二

所属：びわこ成蹊スポーツ大学

住所：〒520-0503 滋賀県大津市北比良1204

TEL & FAX：077-596-8489

E-mail：nakazono@bss.ac.jp